

第8回平和市長会議総会

記者会見

2013年8月5日(月) 16:15~17:00

広島国際会議場ヒマワリ

平和市長会議会長	松井一寛(広島市長)
平和市長会議副会長代理	ポール・シュナイダー(ハノーバー市国際交流課長・ドイツ)
平和市長会議副会長代理	ミシェル・シボ(マラコフ市市長特別顧問・フランス)
平和市長会議副会長代理	マリサ・コール・ロンガピラ(モンテソルパ市国際室長・フィリピン)
平和市長会議副会長代理	マーク・ハケット(マンチェスター市議会議員・イギリス)
平和市長会議副会長	ドナルド・プラスケリック(アクロン市長・アメリカ)
平和市長会議副会長代理	ヤスミンカ・バリョ(ピオ・グラード・ナ・モル市参事官・クロアチア)
平和市長会議副会長	ジョセフ・マイヨラル(グラノラズ市長・スペイン)
平和市長会議副会長	キダー・カリーム(ハラブジャ市長・イラク)
平和市長会議副会長代理	ローザ・ロドリゲス(メキシコシティ市社会開発局長・メキシコ)
平和市長会議副会長	トーレ・ベツビィ(フロン市長・ノルウェー)

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

それでは、ただいまから第8回平和市長会議総会を終えての記者会見を始めさせていただきます。私は、進行役を務めます広島平和文化センター常務理事の湯浅です。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の記者会見には、総会に参加していただいた役員都市の皆様に出席していただいております。会見時間は45分の予定です。

まず、先ほど採択されましたヒロシマアピールの説明を行いまして、その後、出席者の皆様から、会議を終えての感想や、コメントを述べていただくようにしております。記者の皆様からのご質問はその後にお受けしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、ヒロシマアピールにつきまして、松井広島市長からご説明をお願いいたします。

平和市長会議会長 松井一寛（広島市長）：

それでは、このたびの総会で採択いたしましたアピールの内容をポイントを追って説明させていただきます。

世界157カ国・地域、5,712都市の代表が今回の総会の関係者であるということがあります。そこで、『核兵器のない世界』の実現を目指して―「ヒロシマ・ナガサキの心」を世界に―』というテーマで、議論を行いました。

行った結果でありますけれども、日本語でやっているアピールの1ページ目の4パラグラフを見ていただきましょうか。世界の安全保障体制、これが、抑止力という核兵器使用の脅しと、それに伴う言語に絶する恐怖に大きく依存しているというふうな認識を共有することができました。そして、この核拡散というのは、現在も進行中、そして深刻な脅威である、さらには地域のテロリストによる核兵器使用さえ否定できないような現実、非常に危機感を持って、こういった議論に臨んだという認識をここで述べております。

その下の次の五つ目のパラを見ていただきます。経済危機というものが進行しているなかで、それにもかかわらずこの核兵器システムを最新鋭化するために巨額な資金が流れているという現実、人間の基本的なニーズを満たすために必要とされる財源が、このようなところに使われているという事実も押さえた上での議論をしたということがこのアピールのポイントになろうかと思えます。

次のページでは、経過をずっと述べておりますけれども、あえてポイントに絞るなかで申しますと、もう一つ特徴的なことは3ページのほうに少し飛んでいただきたいと思えます。

上から三つ目のパラですが、ここでは、ハラブジャに対するガス攻撃から今年で 25 年目を迎えているということ、そして初めて大量破壊兵器がイーペルで使用されて、まさに 2015 年で 100 年になるといったようなこの状況のなかで、この事例に学びながらも、やはり核兵器のない世界というものはあらためて求めていくということを目標にすることが、重要だという認識をここでは展開しております。

そして、次のパラを見ていただければ、下のほうに言及しております、「最後に」という言い方にしておりますが、放射線の発生源のいかんを問うことなく、いかなる場所においても、これ以上の被爆者、これを出さないように、全力を尽くすということはみんなで確認し合ったというのが大きな流れかというふうに思っております。

そして、この平和市長会議、今まで述べたなかで、しっかりと国連あるいはすべての政府に対しての要請をする際のポイントということで、そのページの下、四つほど項目を掲げております。

一つが、まず原爆がもたらす悲劇について、もっと深く理解を求めるために、まず責任者、核軍縮の責任者、為政者、こういった方々を中心に、広島、長崎にぜひ来ていただきたい、そこで核廃絶に向けた被爆者の心をしっかりと受け止めて、発信していくということをやっていただきたいということ。

二つ目が、いわゆる信頼醸成ということが重要であります。そのために、しっかりした枠組みを作っていただき、二度と核兵器は使わないということをしていただきたいこと。

三つ目は、核兵器禁止条約早期締結あるいは核兵器のない世界を実現するために、やはり有効な措置を早期実現、そしてそのための具体的交渉はとにかく始めてもらいたいということを申し述べております。

そして、四点目は、地球上のさまざまな取組、とりわけ欧州連合、東南アジア諸国連合、ラテンアメリカ、カリブ諸国共同体などの地域共同体で、こういった統合体をつくる際に経験した良い部分、これは生かしながら、そしてさまざまな試練がありましようけれども、そういった部分は、いわば反面教師として、しっかりした経験をもとに、抑止力による安全保障体制といった考え方から、皆、家族である、人類が一緒であるという共同体認識を持った上での安全保障、いわば個々人の安全保障の実現に積極的に取り組んでいこうというふうなこと、これを要請していくということをここに誓ったわけであります。

こういった対応を 2013 年から 17 年までの間、しっかりやっていくということを申し述べております。これが、アピールの主要な点ではないかと私は理解しております。

以上であります。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

ありがとうございました。

続きまして、先ほど閉会のごあいさつをいただきました松井広島市長、それから田上長崎市長さん以外の皆様から、お一人ずつ総会を終えての感想なり、コメントを一言ずつ頂戴できればと思いますが、まずハノーバー市のシュナイダー国際交流課長、お願いいたします。

平和市長会議副会長代理 ポール・シュナイダー（ハノーバー市国際交流課長・ドイツ）：

ありがとうございます。

ハノーバー市を代表いたしまして、心よりの感謝を広島市に申し上げたいと思います。本当に素晴らしい会議を運営、主催してくださったと思います。今回の総会につきまして、二つ申しあげたいことがあります。

大きな前進ができたということを組織として感じております。もう 5,000 都市を超える加盟都市になりました。それが 2 年前です。そして、量だけではなく質のことも考えなければならないと考え方をシフトしてきました。また、地域レベルの活動ということをやろうというのは、平和市長会議にとっては大きな前進になると思います。

これにより、ネットワークが強化できると思います。加盟都市の間のネットワークが強化され、そして政府に対する私たちの声も強くなるでしょう。政治的なリーダー、そして国連に対する私たちの声が強くなると思います。また、市民に対する訴えも、強いものになれると思います。

先ほどのヒロシマアピールであります。世界のリーダーたちに、核軍縮にかかわる方に、広島、長崎の訪問を求めて、そして理解を深めてほしい、68 年前に何が起こったか、理解を深めてほしいという訴えしているのは素晴らしいと思います。

準備会合で、各大使あるいは外交団の皆様にも、何度も何度もこのような私たちが扱っているトピックを紹介してきました。しかし、これは、市長さん、技術的な問題なんですと言われてきました。そして、時間がありませんので、被爆者のことをとりあげたいと思ってもできない、しかしやはりもっと 2020 ビジョンを進めるなかで、そういった交渉にかかわる人たちに、ぜひともこちらに来てもらう、そして声を直接聞いてほしいというふうに思います。

非常に素晴らしい運営してくださいましたことを感謝しております。起草委員会も非常にスムーズに進んだと思います。ありがとうございます。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

続きまして、マラコフ市のシボ市長特別顧問、よろしくお願いいたします。

平和市長会議副会長代理 ミシェル・シボ（マラコフ市市長特別顧問・フランス）：

ありがとうございます。

一つ申し上げたいのは、非常に組織、広島、長崎の市長との緊密な関係が築かれているということです。非常に哲学的なことになりますけれども、核兵器の脅威ということ、あるいは核兵器への恐怖ということが言われておりますが、それは、人間が持っている、人が人を殺すという力をあらわしているものであります。そして、核兵器が爆発する前に、既に人間の考えに影響を与えている、そしてそういったこの脅威から抜け出すためには、核兵器というものをまずなくさなければなりません。

そして、もう一つ申し上げたい点は、この平和市長会議が、今度は、地域グループというものをつくって、一つの地域化を図るということ、これは非常に重要な点であるというふうに思います。新しい問題が提起されたわけですが、日本にとって非常に深刻な福島の問題があります。この点に関しても、今後、検討を深めていく必要があると思います。

また、例えば財政危機や公的な資金が足りない、財源が足りないといった問題がありますが、単に財政的な問題だけ、あるいは危機の問題だけにより、われわれの行動が妨げられてはならないと思います。私たちが十分にインテリジェントかつ賢明であればこの問題を乗り越えられるでしょう。

従って、マネジメントのパラダイム、地方自治体のパラダイムを変えないといけないというふうに思っております。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

続きまして、モンテルパ市のロンガビラ国際室長さん、よろしくお願いいたします。

平和市長会議副会長代理 マリサ・コール・ロンガビラ（モンテルパ市国際室長・フィリピン）：

こんにちは、皆様。モンテルンパ市を代表してまいりましたロンガビラと申します。皆様、このたび招聘いただきましてありがとうございます。

広島市長、長崎市長と直接お会いできるチャンスをいただいたことに感謝しております。そして、来る前から実は神経質になっておりました。実は、初めて広島に来ますし、これほど大きな会議に参加するのは初めてであります。モンテルパ市の国際室長を務めておりますが、なかなかまだ経験が不十分なところもありますので、しかしここに来ることができて、本当に多くのことを学んだと思っています。持ち帰るも

のがたくさんできました。そして、持ち帰るものを、私がここで学んだすべてのものを自分の市に帰って皆さんと共有したいと思います。

広島については、いろいろな記事、本を読んでまいりましたが、やはり実際に自分で来るといふこと、そして被爆者の方の声を実際に自分の耳で聞くといふのは全く違うものだと感じました。心の底より私は最善の努力をしていきたいと思ひます。

行く先々で、必ず広島のこと、そしてどのような悪夢がここで起こったかといふことを伝えていきます。そして、それを通じて、広島が平和の中心地になったといふことを伝えていきたいと思ひます。

モンテナルパ市は、これまで何もしてこなかったといふことを今、反省しています。ここ7年くらい、総会にも参加せず、受身的に何もしなかった、私は、個人としても何度も何度もここに戻ってきて、この活動のためにできることをしたいと思ひています。

私たち一人一人は、違った社会的なバックグラウンドを持っています。経済的なレベルもさまざまです。しかし、間違いなく一つ言えます。大きな都市であっても、小さな都市であっても、豊かであっても、貧しくても、私たちは愛を持っています。そして、平和を愛するといふこと、この平和市長会議に参加して2020ビジョンを達成したいといふこと、そして核兵器のない世界を、そして愛に満ちた平和な世界をつくり出していきたいと心から願っています。ありがとうございました。

市長、そして理事の皆様、本当にありがとうございました。私がこの会議の一員になれたことを非常に感謝し、そして今後は、できることは自分がしていこうと思ひています。ありがとうございます。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

続きまして、マンチェスター市のハケット市議会議員、お願いいたします。

平和市長会議副会長代理 マーク・ハケット（マンチェスター市議会議員・イギリス）：

まず、初めに申しあげたいことがあります。感謝です。本当に、主催者の皆様、ありがとうございます。すばらしい会議の運営をしてくださったと思ひます。広島市長、長崎市長、そしてすべてのスタッフの皆さん、サポートしてくださった方々、ありがとうございます。皆さんのおかげで、この総会が成功裏に開かれたと思ひます。このような会議を準備するのは本当に大変です。自分がやるのは大変だといふことは、私もよくわかっております。

そして、会議全体としては、この総会で現実に前に進むことができたと思ひます。たくさん加盟都市がふえております。そして、それが実を結び始めている、そして

それをもっと深めて、より専門性を高めて、組織としてよりすぐれた仕事を実施していかねばいけません。

行動計画ができました。そして、その焦点は明らかにされていると思います。核兵器のない世界を目指すということなんです。そして、広島、長崎の祈りを世界中に届けるということです。もちろん、ややこしい議論もありました。核兵器によりどのような影響が起こるのか、核実験やウランの備蓄の問題、核兵器に限りません。いずれも、バランスを求められるという側面があります。加盟都市が求めているのは何でしょうか。これまでやってきた会議の焦点をぼやかさないということ、それと同時に加盟都市がより積極的に参加できるように、支部をつくる、地域活動を進めるということは重要だと思います。非常に心を動かされた会議となりました。涙にあふれた気持ちであります。ここに来ることができて非常にうれしく思っております。

福島原発事故については、今後とも考え続けなければいけません。そして、英国では、これは大きな懸念となっています。今、トライデントミサイルが更新されて、新しい世代へと近代化が進んでいます。私は、平和市長会議の一員として、それをとめさせようとしています。国連レベルで、そして世界中に働き掛けようとしています、私たちが抱える仕事は非常に複雑であります。簡単なものではありません。いろいろなことを考えあわせなければいけないからです。今回のこの総会、そしてヒロシマアピールをよりどころに、良いスタートを切って、そして次の4年間の努力をしたいと思っております。

簡単なことだったらもう成功しているはずです。そうではないから、いろいろなやり方で、世界中でそれぞれの貢献をし続けなければいけないのです。そのためには、良い例、悪い例から学び続けなければいけない。そして、それを通じて、理事都市に支援を届け、そして平和市長会議が国際レベルで活躍できるように、そして広島、長崎を中心に、3年、4年、このアクションプラン、行動計画を実施していかなければなりません。できるだけのことを政府に対し訴えていくつもりがあります。

今、採択したヒロシマアピールを通じて、活動を強めたいと思っております。皆さん、本当にありがとうございました。さまざまなご貢献いただいたということ、ご尽力いただきました。私、ここに来ることで非常に光栄であります。私のできることは小さいかもしれませんが、真摯に、ここ数年、あらためて取り組んでいきたいと思っております。ありがとうございました。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

アクロン市のプラスケリック市長、お願いいたします。

平和市長会議副会長代理 ドナルド・プラスケリック（アクロン市長・アメリカ）：

ありがとうございます。私も、また先ほど機会を得ましたので、意見を申し上げるのは避けたいと思います。しかし、とても重要なことを申したいと思います。

松井市長に、本当に広島市におもてなしいただきまして、松井市長、本当に素晴らしいリーダーシップでした。この組織を引っ張ってくださいます、素晴らしいことだと思います。

コメントでも申しました。それから、もしこういったことを言ったのならばどうかと思ったのですが、この二つの市が経験したその悲劇、そしていろいろなお話を伺いました。しかし、皆さん、この2人の市長は両肩にこの組織を初めから担って、責任を果たしてこられました。私たち個々の市長たちが彼らをサポートし、リーダーシップを発揮し、より多くの市民の理解を得るために、経験したことや私たちが話し合ったことについて情報交換し、普及させていきたいと思います。そして、リーダーに対して、ヒロシマアピールに述べられていることについて理解を求めるのが私たちの喫緊の課題であるというふうに考えています。

市長というのは、もっとしゃべるものですが、私が言いたいのはサンキューだけです。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

続きまして、イーペル市のデハネ市議会議員、お願いいたします。

平和市長会議副会長代理 ドミニク・デハネ（イーペル市議会議員・ベルギー）：

ありがとうございます。もう皆さん、同僚の方々がお話を申したので、私は短くお話ししたいと思います。

イーペル市にとりまして、これはターニングポイントでした。私、新しい市長を迎え、そして私も、今回、新しく参加させていただきました。そしてまた、平和市長会議に気持ちを新たに参加しているという気持ちです。しかし、リーダーシップを持って、過去と同じような形で参加していきたいと思います。そして、2020のビジョンキャンペーン協会の事務局もさせていただいておりますし、さらなる実施をしていきたいと思っています。

今回、初めて私がここに来られて、そして平和市長会議においても一つの転換点になっているというふうに思いました。長い、しかし非常に実りある起草委員会の話し合いも、忘れることができません。そして、また理事会におきましては、イーペル市の言ったことについて、記録として残していただきました。そしてまた、特にイーペルにおきまして、ぜひ第一次世界大戦の100年目を祝う会に参加していただきたいと

思います。また、ガスにおいて攻撃を受けましたその記念日におきまして、イーペルにおいて皆さんと集いたいというふうに考えています。

個人的に申しますと、広島に感謝申し上げます。温かく迎えていただきました。すばらしい専門家としての手腕を発揮していただきました。初めてでしたけれども、資料館も拝見いたしました。

そして、個人的に本当に感銘を受けました。それは、過去 68 年前に起こった恐怖を思い出したのみならず、広島と長崎と、そしてイーペルが本当につながっているということがわかりました。恐怖を共有することができるというふうに思いました。私の祖父母が、第一次世界大戦の話をよくしてくれたものです。怖かった、そして被爆者の皆さんが証言してくれたことと同じようなことを語ってくれました。本当に私は、目からうろこのような気がいたしました。ぜひ、広島、長崎市と協力しまして、過去と同じように、そしてわれわれは、ゴールを設定しまして、そしてこれからもリーダーシップをとって、核兵器全廃のために努力していきたいと思っています。

また、個人的に申しますと、長崎と広島の市長と、またその他の理事会役員の皆さんとお会いし、そして士気を高めることができまして本当にうれしく思っております。第 8 回平和市長会議総会ができて本当にうれしく思っております。次回、来られたら、本当にまた同じことを経験したいと思います。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

続きまして、ビオグラード・ナ・モル市のバリヨ参事官、お願いいたします。

平和市長会議副会長代理 ヤスミンカ・バリヨ（ビオグラード・ナ・モル市参事官・クロアチア）：

ありがとうございます。こんにちは、主催者に感謝申します。松井市長、そして組織委員会でご準備されました皆さん、本当にすばらしい会議でした。こちらに戻ってこられて本当にうれしく思います。

4 年前にここに来ました。そして、総会を長崎で開催させていただきました。2020 ビジョンキャンペーンの関係で、広島と長崎にも訪問しました。今回は、私は 1 人で来させていただきました。

ビオグラード・ナ・モルですが、クロアチアの小さい都市です。クロアチアですが、実際、国としては小さいところですよ。加盟して 7 年になります。そして、4 年前、長崎で総会で開催された際に副会長都市になりました。そして、この平和市長会議におきましては、セミパラチンスクでどういったことが起こったかということを知ることができましたし、イーペルにおいてのそのことを知ることができました。しかし、歴

史でそれを知るといふことと、実際にそこに行つて知ることとは別だと思ひます。イラクにも行きましたし、ハラブジャにも今年行きました。これは、大虐殺が起つた25周年記念に参加したものです。そして、こういったストーリーを今まで聞いてきましたが、それが、本当だつたといふことをこの目で確かめることができました。

そして、戦おうといふ気持ちが高まつてきました。クロアチアは小国です。それで、私は自分で問うたんです。こういった会合に出て、いろいろなアクションをとつていく以外に、われわれのメッセージを伝えるためにはどういふふうにしたらいいのか、家に帰つてメッセージを市民に伝えているのか、これが私の疑問でした。それで、私の友人になつてくれた坂本美穂子さん、もとは平和市長会議で、今は資料館のところで働いていらっしゃる方ですが、彼女の仲介もいただきながら、クロアチア、そしてビオグラード・ナ・モルでの原爆展の開催を申し出ました。ビオグラード・ナ・モルは海岸沿いの小さな都市です。クロアチアにおきましては、400万人ぐらゐの人口しかありませんが、首都ザグレブにおきましては、100万人がいます。私たちの市長はザグレブの市長と友人でしたので働きかけた結果、ザグレブでの原爆展開催も実現することとなりました。

本当にすばらしい原爆展が開けるといふふうには思います。そこで、写真を見ていただいて、そこで読んでいただきまして、そして被爆者が、証言していただくといふことができる。私は、被爆者と言つたときは、男ではないので、女性ですので涙が出てたまらないのです。そして、被爆者がニューヨークで証言してくださっている、そしてそれもマンチェスターにおきましても、証言をお聞きいたしました。そして、ここでもお聞きいたしました。被爆者の証言をお聞きいたしますと本当に、本当に違ふんです。特に、展示を見てから、そして被爆者の証言を最後のところでお伺ひする、ザグレブでもそうでした。そうすると、本当に感激で心がいっぱいになるんです。それが違ふところですよ。

その後においては、たくさんのメンバーが出てきました。小国です。35都市しか参加していません。人口に関しましては400万人といふふうには伺ひました。そのなかで、35といふのはかなりの都市の数だと思ひます。松井市長、それから広島の方、すばらしい滞在をありがとうございました。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

続きまして、グラノラズ市のマイヨラル市長、お願いいたします。

平和市長会議副会長 ジョセフ・マイヨラル（グラノラズ市長・スペイン）：

皆様、こんばんは。まず最初に、私のほうから、この平和市長会議総会に皆さんと

出席できたことを非常に名誉に存じます。そして、原爆投下 68 周年記念に、皆さんとここにいられることは非常に名誉なことだと存じております。

そういった意味で、特に松井市長に対して心から感謝を申し上げたいし、そのスタッフにも心から感謝したいと思います。そして、このような重要な会議を開いていただいたことに感謝したいと思います。

これは成熟した市長会議の総会だと思います。この市長会議は約 30 年になります。既に確立した、基盤のしっかりした将来性のある団体であると考えます。そして、私たちは、一番いい時期を迎えていると思います。それは、データによっても証明されています。

まず、私たちは、世界の自治体が集まる重要なグループとなりました。このなかでは、自分の意思により参加している自治体がつくっている、これが市長会議であります。そして、平和を擁護する団体であります。そして、そのなかには、世界中の最も多い参加者が平和を求めて参加しています。そして、特に自治体の代表者たちが、平和に対する決意を表明することが重要です。

私は、この成熟した団体であると申しましたけれども、それは、私たちが採択したこのアピールの内容でもわかると思います。私たちは、アピールを採択しました。そして、行動計画も採択しました。野心的な計画です。そして、将来の日程も定めています。そして、私たちが、どういう道を歩くのかということは明確に示しています。もちろん、将来の目的というのは、核兵器の全面的廃絶という最終的な目的のためのロードマップです。私たちは、平和を目指して、こういった活動しているわけですが、現在、残念ながら経済的な深刻な危機に見舞われておりますし、重要な予算が軍事支出につき込まれているわけです。そういった一方で、社会的ニーズに対しては、十分なお金が投資されていません。

そういったなかで、私たちは、強い責務を持って次のように言わなければいけないと思います。政府は沈黙して、私たちの国が余りにも沈黙しているときに、私たち自治体は声を上げなければいけません。私たちが、自分たちの地元で、自分たちの地域のなかで、自分たちの世界平和の声を上げなければいけません。そして、広島と長崎の声を伝えなければいけません。広島と長崎は、リーダーシップをとって、世界の平和構築に尽力しています。非常に不可欠な、世界的な重要な貢献であると思います。

どうもありがとうございました。

平和市長会議副会長 キダー・カリーム（ハラブジャ市長・イラク）：

初めに、広島市長と長崎市長に感謝申し申し上げます。今、この地におり、私は、ゲストとしての気持ちはありません。ここは、ハラブジャと同じだというふうに

思っています。広島は発展しました。そして、再建されました。ハラブジャ市もまたその経験を学習し、私たちの市を構築していきたいと思えます。

広島に来るのは初めてです。でも、ハラブジャにいるような気がします。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。事務局のご尽力に感謝申し上げます。素晴らしい会議でした。

また、ご支援と、そしてご援助をハラブジャにいただいていることは広島に対して感謝申し上げます。

平和活動をこれからも続けていきたい、そして次世代のために、そして子供たちのために続けていきたいというふうに思っています。特に、東南アジア、それから中東、こういったところにおきましては、一触即発の土地があるわけです。そういった状況をかんがみなければなりません。

最後になりましたが、感謝の気持ちを皆さんにお伝えしたいと思っています。核兵器は、2020 までに必ずや全廃しなくてはなりません。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

ありがとうございました。

続きまして、メキシコシティ市のロドリゲス社会開発局長、お願いいたします。

平和市長会議副会長代理 ローザ・ロドリゲス（メキシコシティ市社会開発局長・メキシコ）：

まず最初に、こちらの会議を主催していただきました広島、長崎両市長の方々に、素晴らしい会議の成功をお祝い申し上げます。と申しますのは、このような素晴らしい会合で、素晴らしい結果をえることができたということです。つまり、長崎と広島、そしてメキシコシティ市と申しますものは、この3都市の間で、非常に強い連帯感というものが、市のなかでも、また国のレベルでもあります。

つまり、メキシコシティ市におきまして、やはりこちらの長崎、広島の前爆の記念の日というものに対して強い連帯感を示し、このヒロシマアピールにつきましても、私たちは、二度と核兵器の使用は認めないというこの強い決意を強烈に支持いたします。

そして、それとともに、自治体の加盟というものを促進し、この平和市長会議へのラテンアメリカおよびカリブ地域の参加というものに尽力を尽くします。

最後になりましたが、こちらの第8回総会にご参加いただきました皆さん、そしてまた、ここに参加の皆様の前の間においての信頼を増幅させることによりまして、この平和市長会議というものが成功したのだということに強い感銘を受けました。そし

て、メキシコでは、来年、やはり同じ目的の重要な大きな会議が開かれます。それでするので、また最後に、広島、長崎の皆様、両市長に対して特に御礼申し上げて、私の言葉といたします。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

ありがとうございました。

続きまして、フロン市のベツビィ市長、お願いいたします。

平和市長会議副会長 トーレ・ベツビィ（フロン市長・ノルウェー）：

ありがとうございます。パネルの皆さんに感謝申し上げます。

皆さん、もう私の言いたいことを言われてしまいましたので、私は、もう言うことはなくなりました。ただし、一言申します。強調したいんです。人道主義、3ページ目に、平和市長会議というのは人道的な組織であるというふうに書いています。これを強調したいと思います。この言葉はとても重要です。われわれのゴールを設定しました。そして、核兵器全廃の道を歩んでいきたいと思っています。兵器という言葉よりも、ツールを使えばどうでしょうか、もっとそういったものを使えると思うのです。

悲劇的なストーリーがいろいろな形で展開しました。話をしているときにほほ笑んでお話しすることができないんです。でも、ほほ笑みを持つということは、いいツールではありませんか。正しく使えばいいツールとはなりませんか。そして、人道的な形でほほ笑みを伝えていく、それが、われわれができることです。

市長として、すべての市民に責任を持っています。彼らの行動に責任を持っています。私たちは難しい課題に対応しなければなりません。一例を述べさせてください。サンタクロースは、私たちの市に生まれたと言われておりましたので、私は市長として、フロン市をサンタクロース生誕の地と決定しました。サンタクロースは、世界で最も人間らしい人物です。そうしたことがオスロでの画期的な会議、そして2人の市長のジュネーブ訪問に私を結びつけました。2人の市長のジュネーブ訪問はすばらしい貢献であったと思います。

この道のりを見つけたということは本当にうれしいことです。そして、メキシコの会議でも頑張っていきたいと思います。この記者会見が終わったならば、もう少しほほ笑みも多くなるというふうに思います。そのほほ笑みを決して市民にも忘れていただきたくありません。ありがとうございました。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

以上で、出席者の皆様からの感想なりコメントを終了させていただきます。

それでは、記者の皆様からの質問をお受けいたします。質問される際に、最初に社名をおっしゃっていただいて、それからどなたへのご質問かということを加えておっしゃっていただきまして、発言していただければと思います。よろしくお願いいたします。どうぞ。

読売新聞：

読売新聞のイデといいます。

まず、松井市長にお伺いしたいことがございます。一点目ですが、日本にとって、やはり来年4月のN P D Iが大変大きな核廃絶への道のエポックかなと思うんですが、ホストシティとして、あるいは平和市長会議として、どういうコミットメントをされるのかということが一点お聞きしたいことです。

それから、二点目なんですが、これは、皆様のなかでどなたでも構わないんですが、2020 ビジョンについてお聞きしたいと思います。会議Ⅱのなかで、ハケット副会長さんが、非常に2020 ビジョンの残念ながら世界状況からいうと厳しい状況があつて、要は、あと2年後までに検証して、別のビジョンをつくる必要があるんじゃないかというご提案されたと思うんですが、これについては、例えばヒロシマアピールの起草委員会あるいは理事会、そういうところで審議はあったのでしょうか。

また、もしなければ、現実としては、非常に世界の各情勢は非常に厳しいんですが、こういうことについていかがお考えなのか、もし役員の方で、ご意見がある方があったら教えていただきたい、その二点です。

平和市長会議会長 松井一實（広島市長）：

まず、最初のほうですが、来年の春のN P D I、広島は、まずロジスティックといえますか、会議の設営ということが重きにありますので、それに対してしっかりやるということですね。

たぶん今、言われたのは、ロジスティック・プラス・サブスタンシャルといえますか、中身についてどういうふうな考えかということだと思います。具体的に、会合そのものに広島市が関与するということは、機会は余りないんじゃないかと思えます、外相会合でありますから。ただ、外相会合の位置づけは、このアピールを作成する過程で議論になりましたけれども、そしてこの場でも議論があつたというふうに理解していただきたいと思いますが、今までは、核兵器を持っている国が、国同士で疑心暗鬼に陥りながら、核の軍縮をどうするか、核の拡散抑止をどうするかというふうな状況の中で、厳しい環境があるということでありましたので、むしろ核兵器を持たない国が、その国の安全保障という視点ではなくて、人間一人一人の安全保障という視

点から核兵器を考えていく、そしてそれをしっかり訴えていくという議論が、なされることを期待しておりますし、まさにその進め方は、この広島、そして平和市長会議が求め続けている立ち位置ではないかというふうに思っています。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

ありがとうございました。

もう一点の2020ビジョンに関する質問がありましたけれども、それに対して、どなたか、お願いします。

平和市長会議副会長 田上富久（長崎市長）：

2020ビジョンについては、基本的に詰めた議論をしているわけではありません。ただ、2020年、要するに被爆者の皆さんが、まだお元気なうちにといいますか、核兵器のない世界というのをつくり出そうということが2020ビジョンの一つの大きな目標だというふうに思っています。それに向けて進むという思いは、全員、変わっていないというふうに思いますし、またそのなかに含まれている議定書の動きにしても、これは、核兵器禁止条約の流れと方向を同じにするものであって、そこに向かうということも変わっていません。

ただ、今後、具体的な2020ビジョンというのをどういうネーミングにしていくのか、あるいはさらにそこに向けて、あるいは次のステップに向けてどういったことをしていくのかというのは、先ほどハケットさんが言われたというお話がありましたけれども、そこに向けて、具体的に検討していく時間がこれから始まるというふうに思っています。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

ありがとうございました。よろしいでしょうか。

そのほかに、ご質問、いかがでしょうか。

共同通信：

共同通信のオカダと申します。

松井市長にお伺いしたいんですが、最初のヒロシマアピールのポイントの一つのところで、放射線の発生源のいかんを問わず、いかなる場所においても、これ以上、被爆者を出さないよう、全力を尽くさなければならないというところは挙げておられたんですが、これは、福島原発事故を踏まえ、原発事故で発生するいわゆる漢字で書かない被ばく者のほうも含めたという意味合いなのかというのをお聞きしたいんです。

平和市長会議会長 松井一實（広島市長）：

そのとおりです。

共同通信：

市長としては、原発と核兵器は違うというようなことは再三おっしゃっておられたんですが、そうおっしゃっておられることと今回のアピール文については、少しかみ合わないような気もしなくもないんです。

平和市長会議会長 松井一實（広島市長）：

全然、矛盾はありません。しっかりとかみ合っています。私は、このアピールを策定する場でも申し上げましたけれども、人を殺すための核兵器と、放射能といいますか、核エネルギーを平和利用に用いるための原子力発電は、目的においてまず違うということを前提に考えていこうということで説明いたしました。

ただ、そこで共通のラディエーション、放射能被害が生じるというその点に関しては、放射能を浴びることのないようにするという視点での対応は、それぞれの立場でやっていく必要があろう、しかし究極は、原爆の被爆者のような事態を起こさないようにするという視点で、それぞれ取り組んでいく必要があろうということであります。

ですから、その放射能被害を避けるべきだという問題意識は共通だと思います。ただ、それをどういふふうに対応していくかということに関しては、片やエネルギーをどういふふうにつくり、そして、今、NPT再検討会議でも、原子力の平和利用する権利は認めようというなかでの対応と、絶対的な悪である核兵器、これは、根絶しよう、廃絶しようというテーマとして考える場合のとらえ方は、それぞれ別ということもあり得るのではないのでしょうかということをおしあげているので、これは皆さんに了解いただいたのではないかと考えています。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

ほかにいかがでしょうか。

中国新聞：

広島の新聞社で中国新聞のオカダといいます。

今回の行動計画で、焦点、柱の一つだった核兵器禁止条約についてですが、行動計画でも、特に新しい取組というのもなくはなかったんですが、これまで核兵器禁止条約の締結というのは、ずっとNGOや非核兵器保有国が求めてきて、なかなか実現していない状況にありますが、そこを乗り越えて、核兵器保有国に協力を求めていくためには、

具体的にどういう取組が乗り越えていくためには必要だと思われますか、松井市長と、あと核兵器保有国の都市の市長さんにお伺いします。

平和市長会議会長 松井一實（広島市長）：

私自身の考え方ですと、核兵器保有国が、具体的な行動を起こす以前に、現状における問題意識をあらためるということが必要であろうということで、やはりこのアピールのなかで訴えているということを理解いただきたいと思います。

安全保障体制というのが、核兵器を使った抑止力、この抑止力というものが、本当に意味があるものだと思っておられるから、核兵器保有国は、本来ならば国内のもっと違うところに使っている財源を兵器開発のために投入しているというふうな認識に貫かれております。むしろ、本来、使うべき予算、財源を別に使う、そのためには核兵器というものが、抑止力というものとしては無力であるというふうなこと、発想の転換を為政者がするというのを強く訴え、そこがすべてのスタートだと思えます。小手先の対応ではなくて、為政者の基本的な考え方を変えてもらうということが強く求められているというふうな認識に立っています。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

誠に申し訳ございません。今日は、8月5日ということで、式典の前日で、行事が入っておることがございます。最後、オカダさんの後、もう一人ご質問をお受けしたいと思うんですが、オカダさん、核保有国の出席者の皆さんというふうにおっしゃったんですが、どなたかご指名いただけませんかでしょうか。

アクロン市長さん、よろしくお願いいたします。

ドナルド・プラスケリック（アクロン市長・アメリカ）：

もう先ほどのコメントで申し上げたと思います。連邦政府を代弁することは、市長はできないのです。政府の政策の全てに賛同しているわけではありませんが、今の具体的なご質問にはお答えすることはできません。

というのも、質問自体が理解できなかったからです。明々白々なディスカッションがあったのは事実です。そして、簡単に申し上げますと、まずはもっと意識を高めなければいけない、そしてわれわれは、秩序を変えて、そして信頼性を醸成しなくちゃいけない、そして三つ目のポイントとしては、市民たちが一緒になって、そしてどのようにしてグローバルな核軍縮を実行していくかということのお互いの情報交換もしなければいけないということを申しました。

そして、平和市長会議がやっているとても重要なところは、市長がここに参与して

いるということです。そして、市長というのは、市民をして、もっと意識を上げて、そして連邦政府に対して、膝を付き合わせて、これはどのようにしたらいいかということのアピールすることにあるのです。でも、どのようなやり方にするかというふうに具体的に答えられるとしたならば、もっと市長さんとしてお金をいただかないと、給料が上がればというふうに思いますが、お答えになっているでしょうか。

司会（湯浅敏郎 広島平和文化センター常務理事）：

すみません、先ほど申しましたように、誠に申し訳ないんですが、あと一問にさせていただければと思います。すみません、よろしくお願いします。ご質問がある方、お願いいたします。

特にないようでしょうか。

では、特にないようですので、これをもちまして、記者会見を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

壇上の皆様、ありがとうございました。